



「新たな農福連携の推進に向けて」

滋賀県では、農業分野における障害者の活躍の場を広げるとともに、農業と幅広い福祉(障害者、医療、高齢者、子ども食堂など)の連携による取組を「新たな農福連携」として、「誰もがいきいきと地域で暮らし、ともに働き、ともに活動する共生社会づくり」を進めています。





はじめに



国では、農福連携は障害者等が農業分野で活躍することを通じ、自信や生きがいを持ち社会参画を実現する取組としています。農福連携の主な取組としては、農業者と福祉事業所等の間で行われる「農作業受委託」が挙げられることが多く、農業者の収益や効率向上、障害者の工賃向上等につながる事例も紹介されています。

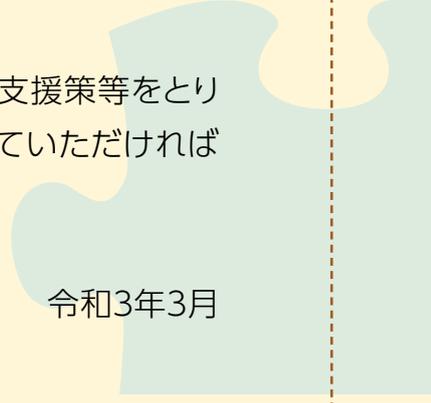
一方、本県の農福連携は、農業分野における障害者の活躍の場を広げるとともに、**農業と幅広い福祉（障害者、医療、高齢者、子ども食堂など）の連携による取組を「新たな農福連携」として、「誰もがいきいきと地域で暮らし、ともに働き、ともに活動する共生社会づくり」**を目指しています。

県内での「新たな農福連携」としては、農業者が福祉作業所等へ農作業の一部を委託する農作業の受委託、福祉事業所等による農産物の生産・販売、農家の方から地域の子ども食堂への農産物の提供、医療・介護現場でのリハビリテーションの一環としての農作業の導入などがあります。

農業や農作業には、農産物の生産活動以外に、癒しや安らぎをもたらす機能、身体能力を高める機能、地域の結びつきを強める機能などがあるといわれています。このことから「新たな農福連携」の取組を進めることは、「農業」を一つのツールとして地域の交流が深まることが期待できます。

本冊子では、県内での「新たな農福連携」の事例や県の制度や支援策等を取りまとめて紹介していますので、みなさまの今後の活動の参考にしていただければ幸いです。

令和3年3月



目次

観音寺自治会×社会福祉法人 パレット・ミル(栗東市)	1
(しがの農×福通信 第4号(2019年7月)掲載)	
共栄精密株式会社 高島きのことセンター(高島市今津町)	3
(しがの農×福通信 第5号(2019年10月)掲載)	
社会福祉法人 虹の会大地(高島市安曇川町)	5
(しがの農×福通信 第5号(2019年10月)掲載)	
一般社団法人就農ベンチャー協会 びわこ板倉ファーム(守山市)	7
(しがの農×福通信 第6号(2020年2月)掲載)	
ひのでファーム(蒲生郡日野町)	9
(しがの農×福通信 第8号(2020年12月)掲載)	
きたなかふぁーむ(野洲市)	11
(しがの農×福通信 第9号(2021年3月)掲載)	
NPO法人縁活おもや(栗東市)	13
(しがの農×福通信 第7号(2020年10月)掲載)	
「遊べる・学べる淡海子ども食堂」にぜひ、ご参加ください!	16
(しがの農×福通信 第7号(2020年10月)掲載)	
「農作業をリハビリテーションに生かす」	17
(しがの農×福通信 第8号(2020年12月)掲載)	
葉菜屋(東近江市池田町)	19
(しがの農×福通信 第9号(2021年3月)掲載)	
農福連携の推進に向けた県事業について(令和3年度)	22
「しがの農×福ネットワーク」参加団体・個人を募集しています!	23

掲載記事は「しがの農×福通信」の原稿をもとに令和3年3月時点の内容に更新しています。

観音寺自治会×社会福祉法人 パレット・ミル(栗東市)

しがの農×福通信
第4号掲載
(2019年7月)



● 観音寺地区とは

観音寺地区は栗東市の中心部から約7km、金勝アルプスに位置し、周囲を山に囲まれた中山間地域にあり、集落から望む棚田の景観と民家の風情ある家並みが魅力の静かな山間の集落に、14世帯が暮らしています。パレット・ミルは集落の入口に位置し、約80名の利用者の方が自立を目指して働いておられます。

● 連携のきっかけ

平成29年(2017年)10月に、観音寺自治会から、「人手不足で手が回らなくなってきた農地を一緒に守ってほしい」との依頼を受け、パレット・ミルが集落の農家から農地を借り受け、水稻やにんにく等を栽培し、協働で農業に取り組まれています。定植や収穫の農作業だけでなく、日々の田んぼの水管理や農道の草刈りも協働で行っています。月1回「天水会」という会議を開催し、次は何を植えるかなど、作業内容・日程を毎回相談しながら進めています。

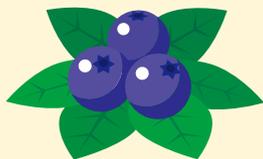
連携を始めるまでは、年2回の集落内の道路脇の草刈りと夏祭りへの出店のみつながりだったそうですが、毎月顔を合わせるようになったことで、地元の大野神社で行われる祭りの神輿の担ぎ手に参加したり、集落の方とのバーベキュー大会を開催するなど、中山間地域の活性化の一助になっています。



●農作業の様子

取材当日は、集落の方4名、利用者4名、スタッフ2名がにんにくの収穫・調整作業に取り組まれていました。利用者が集落の方に調整作業について質問しながら作業に取り組んでおられたり、作業中や休憩時間も集落の方と利用者が気軽に会話されるなど、とても良い雰囲気で作業されている様子が印象的でした。

また、パレット・ミルでは、施設開園当初の23年前からブルーベリーの栽培に取り組み、現在は約1トン以上の収穫があります。このブルーベリー園の草刈りも集落の方と協働で行っています。利用者の方が園で草刈り機やチェーンソーの使い方や安全対策まで習得することによって、外部の草刈りの仕事を請け負うことができるようになり、大きな収入源になっています。



●今後の取組

パレット・ミルでは、今後も収益をあげて利用者の工賃に反映していくため、新しい取組にも積極的にチャレンジされています。その取組の一つに、山に囲まれた地の利を活かした「高麗にんじん」の栽培があります。集落の方の山をお借りして、水はけや日当たり等のアドバイスを受けながら、試験的に栽培に取り組まれています。



●副所長 佐藤 博志さんのお話

稲作はもちろん農業については素人なので、集落の方になんでも教えてもらいながら一緒に取り組んでいます。小さな集落なので農作業を始めると「ここはまだやなくていいよ」とか「こうするんやで」と集落の方が教えてくれます。

私たちはこの地域にお世話になって長年やってきました。この素晴らしい棚田の景色と一緒に守っていかなければならないという使命感を持って農業に取り組んでいます。



DATE

【組織名】

社会福祉法人 パレット・ミル

【所在地】

栗東市観音寺139

【TEL】

077-558-4500

【FAX】

077-558-4522

【HP】

<http://palletmill.jp/>

共栄精密株式会社

高島きのこセンター(高島市今津町)

しがの農×福通信
第5号掲載
(2019年10月)



●事業概要

共栄精密株式会社は、東近江市に本社を置く、半導体事業を主とした精密部品の品質検査等を行う会社です。平成21年から農業分野に進出され、熊本県人吉市で、国産の原材料・栄養体・種菌にこだわり、国際認証を取得し、菌床きのこ類の自社栽培に取り組まれてきました。平成28年4月から高島市の旧今津西小学校の廃校校舎、平成30年からは甲賀市の廃工場を活用し、生キクラゲ等を製造・販売されています。

●高島きのこセンターでの取組

高島きのこセンターで働く従業員は11名で、そのうち障害者の方が4名、自閉症の方が1名です。

障害者の従業員は、菌床への散水、室内の水掃き、商品のパック詰め、シール貼り、箱詰めなどに従事されています。女性従業員が多いため、菌床の運搬などの力作業を障害者の男性従業員に任せることもよくあるそうです。

基本的には毎日決まった作業になりますが、日によって変わることもあります。当初はいつもと違う作業が入るとパニックになってしまっていたことが、最近は作業に慣れてきたことで、保護者が驚かれるほど、臨機応変に対応できるようになったと現場責任者の方がおっしゃっていました。

製造したきのこは、東京の大手デパートや生協等を中心に出荷をされています。年間を通じた安定供給により、大手デパートなどから信頼を得ることができ、また年間を通じて継続した仕事を作ることによって、障害者の方への仕事が生まれ、障害者雇用につながっています。

本人の能力次第で、高齢者や障害者などに「キョウイク(今日行く所)」と「キョウヨウ(今日の仕事)」を提供し、共に汗を流し、共に笑える事業を目指しておられます。

●代表取締役社長 下田政寿さんの取組に対する思い

きのこ生産は第1次産業ですが、工場栽培で田畑を所有しておらず、商品をお客様に届けるという意味では第2次産業に近い。「1.5次産業」という考えで取り組んでいます。

農業を異業種からやるのは非常に大変ですが、色々な方の協力を得ることができ、10年先でもやっていける事業としなければならないと思っ

てやってきました。持続可能な事業とするために、流通業界やスーパーなどの商品の提供の場との連携など、農業と福祉の壁を越えた「農福商工連携」を目指しています。

また、高島地域でも地元の人財を育てて、地元の力で継続できるようになり、引き継げるくらいまでに至れば、この事業は成功だと思っています。



●栽培パートナー募集しています!

栽培を終え廃棄する菌床を地元農家へ格安で販売し、肥料として再利用する循環型農業に取り組まれています。

また、高島地域ではまだ実績がありませんが、熊本では、障害者施設へ菌床を販売し、施設の方々に栽培の仕事を提供することで、共に安全で美味しいきのこを作っているとのこと

です。現在、共栄精密株式会社アグリフード事業部では、このような栽培パートナーを求められていますので、関心を持っていただいた地元の農家や福祉事業所、一般企業の方がいらっしゃいましたら、是非、共栄精密株式会社にお問い合わせください。



DATE

【組織名】

共栄精密株式会社

【事業本部所在地】

東近江市沖野4-5-33

【TEL】

0748-22-3139

【高島きのこセンター所在地】

高島市今津町保坂796-1

【TEL】

0740-20-9014

【HP】

<https://www.kyoei-seimitsu.co.jp>

社会福祉法人 虹の会大地(高島市安曇川町)

しがの農×福通信
第5号掲載
(2019年10月)



●「虹の会大地」ってどんなところ？

「社会福祉法人虹の会大地」は、生活介護事業所で現在25名の障害者の方が利用されています。

園芸用土「ふれん土」の製造や野菜・花苗の生産・販売、近隣の休耕地を借りてじゃがいも、にんにく、タマネギ、さつまいもなどの野菜の生産を、年間を通じて行っています。

●看板商品「ふれん土」は、地域の人気商品!!

看板商品の「ふれん土」は、事業所立ち上げ当初の30年以上前から取り組んでいる看板商品で、主に高島市内のホームセンターで150円/袋で販売されています。

全て自然由来の物を使用し、米ぬかや腐葉土などを混ぜて自然発酵を何度も繰り返し、手間を掛けて作られた土は、地域の人気商品になっています。

また、「ふれん土」を実際に使用されたお客様から「この土を使ってから、畑の土が柔らかくなったよ」などの感想が、この商品を作り続けていく励みとなっていますと担当の方が笑顔で教えてくださいました。



● 野菜や花の苗も作っています!

「虹の会大地」では、看板商品の「ふれん土」以外にも野菜や花の苗を生産しています。苗の生産といっても、小さな種を一粒ずつ専用の容器に播き、一定の大きさまで育てた後、販売する容器に植え替える等の手間のかかる作業になります。特に、種まきや植え替え作業は、同じ作業の繰り返しになるので、根気が必要となりますが、利用者さんはコツコツとその作業に取り組まれるそうです。

苗生産も「ふれん土」と同じで、自分達の作った野菜や花の苗を購入してくださる地元のお客さんの存在が大きな励みになっているそうです。



● 地域のイベントではサツマイモが人気!

サツマイモ「紅はるか」を生産し、毎回、秋の地域のイベントでは「やきいも」の販売を行っています。「大地と言えば、やきいも!」といってもらえるくらいに地域では知られるようになってきたそうです。



● 地域に頼られる「虹の会大地」

数年前にハウスを建てたことで、地域の農家さんが「虹の会大地」の取組に関心を示してくださり、休耕地の活用を任していただけるようになりました。

現在は、施設内での事業の充実等を図っていることもあり、休耕地での野菜生産は少し待ってもらっているそうです。

今後も地域に関わりながら、地域に根ざした事業の展開を進めていきたいと考えておられます。



DATE

【組織名】

社会福祉法人 虹の会大地

【所在地】

高島市安曇川町下小川2441番地25

【TEL】

0740-32-3860

【FAX】

0740-32-3862

【HP】

<https://www.shiganijinokai.net/daichi>

一般社団法人就農ベンチャー協会 びわこ板倉ファーム(守山市)

しがの農×福通信
第6号掲載
(2020年2月)



●事業概要

一般社団法人就農ベンチャー協会 びわこ板倉ファーム(以下、「びわこ板倉ファーム」)は、就労継続支援B型事業所として2013年に開設されました。現在、障害者8名とスタッフ6名で、農業を主な事業として、露地とパレットでの無農薬、有機栽培による野菜やお米の生産、近隣農家からの収穫や草刈りの受託など、様々な農作業に取り組まれています。

●オーガニックコットンの栽培

昨年5月に草津市の打ち直し・丸洗い専門店(株)みつやからの委託を受け、オーガニックコットンとして、和綿や緑綿、ペルー産のバルバデンセンの3種類の高級綿の栽培を始められました。綿の栽培は初めてで、県の「農業技術向上支援事業」を活用し、専門家からアドバイスを受けたり、自らインターネットで調べるなど、試行錯誤をしながら取り組んだ結果、今年度の収穫量は約10kgとなりました。「肥料はすべて手作りで、無農薬なので、害虫被害などに悪戦苦闘しましたが、初年度にしては上質な綿ができました。来年度は3倍の量を目標にしています。」と、代表理事の西山英理さんはおっしゃられます。収穫後の綿繰り作業もすべて利用者の皆さんの手作業で行われています。また、(株)みつやと共同で綿を加工したオリジナル製品の開発や、ワークショップ、収穫体験などをできないか、次の展開も考えられているようです。





● 地域との交流

びわこ板倉ファームでは、地域との交流にも力を入れています。お正月の餅つきや節分の巻き寿司作り、畑での収穫作業に近隣の児童福祉施設や子ども食堂、放課後等デイサービスの子供達を招いてイベントを開催されています。また、休憩スペースの「板倉カフェ」は、間伐材でできた水屋や大きな薪ストーブもあり、使用しない日は貸しスペースとしての活用も考えられています。

人との交流が限られている利用者の交流の場を作りたい、次世代を担う子ども達に差別と偏見のない社会を作って欲しい、そんな思いから積極的に交流の機会を設けておられます。

● 春から貸し農園を始めます!

今春から沢山の方に気軽に土と触れ合う場を提供したいという思いから、貸し農園事業をスタートされます。パレットを利用した農地を1区画3,000円で一般の方に貸し出し、平日の水やりや草引き等の管理をびわこ板倉ファームで行い、土日に市民の方に農作業や収穫に来ていただき、「板倉カフェ」で採りたて野菜の調理やバーベキューを楽しんでいただく仕組みを考えておられます。現在は、オープンに向けて、堆肥をたっぷり含んだ土づくりを進めておられます。

● 代表理事 西山 英理さんの 取組への思い

びわこ板倉の家(株)からの木工や薪割りの業務請負の仕事、行政からの掃除の委託など、農業以外の仕事もいくつか持っています。また、「福福連携」として他の福祉事業所さんと協働し、地域の農家さんでの農作物の収穫作業やオーガニックコットンの製品加工の分業なども行っています。

最近は農作業をしていると地域の方からよく声を掛けて頂くようになり、農作業のアドバイスをいただいたり、野菜のお裾分けまでくださるようになりました。福祉事業所も地域に貢献し、地域とwin-winの関係でありたいという思いで、これからも様々な事業を展開していきたいです。



DATE

【組織名】

一般社団法人 就農ベンチャー協会
就労継続支援B型事業所
びわこ板倉ファーム

【所在地】

守山市中町102

【TEL】

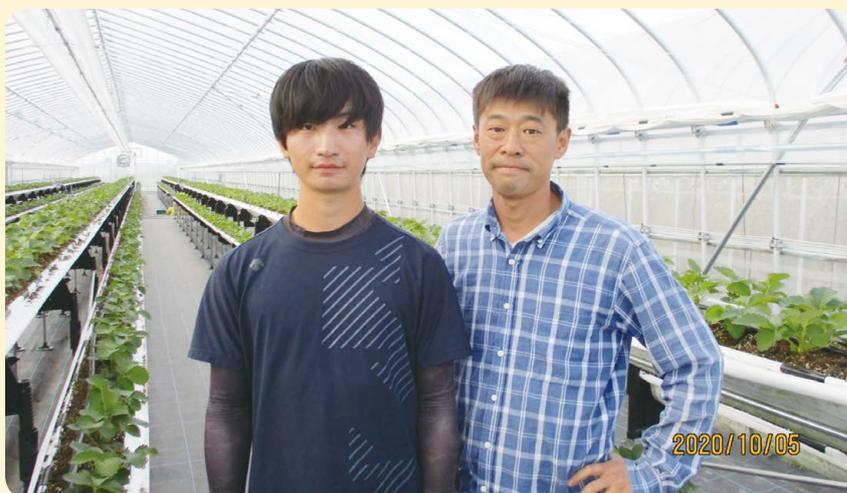
077-598-0090

【HP】

<http://www.itakura-farm.jp/>

ひのでファーム（蒲生郡日野町）

しがの農×福通信
第8号掲載
(2020年12月)



● ひのでファームってどんなところ?何を作っているの?

ひのでファームは、里路久光さんが蒲生郡日野町で経営している農園です。お米や野菜を栽培されているほか、今年から新しくイチゴの栽培も始めました。里路さん家族で経営されてきたひのでファームですが、2020年4月から初の従業員として20歳のMさんが仲間に加わりました。また、一組のご夫婦も研修生として一緒に作業されています。現在は総勢4名で運営されているひのでファーム。今回は、期待のMさんと里路さんの出会い、現在の様子をご紹介します。

● 里路さんとMさんを繋げた農福連携マッチング

2015年に就農された里路さんは、家族だけでの経営に限界を感じ、就農4年目頃から従業員の雇用について考えるようになりました。元々、学校の教員をされていた里路さんは、学校で障害や困難を抱える子どもたちとの関わりもあったことから、「障害者雇用」も頭の中にあっただのですが、誰に相談したらいいのかすら分からない状況でした。

そんな時、里路さんは就農5年目で滋賀県農業会議主催の『令和元年度 しがの農業経営塾』の講義で“農福連携マッチング”を知りました。「これにチャレンジしてみよう!」と思い申し込み、NPO法人滋賀県社会就労事業振興センターの中塚センター長(当時)や滋賀県農業会議の稲本さんなど様々な方の力を借りて、Mさんと出会いました。Mさんの通う作業所の方とも相談しながら、一ヵ月に一週間の農作業を三ヵ月間、「体験実習」として経験してもらうこととなりました。体験実習の内容は、Mさんのために特別な作業を準備することなく、里路さんが日ごろから行っている野菜の収穫作業などを一緒に行いました。このようにして、農業の魅力や辛いところなどを少しでも感じてもらうことが里路さんのねらいでした。冬の寒期中、野菜の収穫に苦戦しながらも頑張る姿が印象的だったそうです。その後、Mさんの通う作業所の方とも話し合いを重ね、本人の意思も確認し「雇用」という運びになりました。本格的に社会で働くことが決まったMさんは、楽しみとドキドキが半分ずつだったそうです。

● 新たなチャレンジの ステップにもなった雇用 ～里路さんからのメッセージ～

「新たなことにチャレンジし、ワクワクするような農園を作り上げていく。そして、消費者の方に喜んでいただきたい。今回、Mさんを採用したことで、自分達だけだと手が回らないと諦めていた夏野菜やイチゴ栽培などもチャレンジできるようになりました。」と里路さんは話します。根気のいる作業であってもコツコツと丁寧に仕上げているMさんは、多品目を扱うひのでファームにとって重要な戦力となっています。

「障害者雇用では、一般的な雇用に比べ困難に感じることや効率が下がる場合があるのも事実です。しかし、少し工夫すれば、任せられることもたくさんあります。」と話す里路さんは、個性を尊重し居場所を作ることによってその人にしかできないような力を発揮できると考えています。Mさんご本人も「雇用」という形になったことで、自分が成長できたと感じておられます。

里路さんは、これから農福連携や障害者雇用を考えている方々へのメッセージとして「農福連携・障害者雇用のハードルは低くはないです。でも、それを進めていくことで、農業者の栽培面積の拡大や品目の増加と障害者の雇用先の増加により両者にとってプラスがあります。そのように考える方が増え、両者の笑顔が増えたらいいなと思います。」と笑顔で伝えてくださいました。



● ひのでファーム自慢の「うちのご野菜」!

ひのでファームでは、『皆さんに“美味しい”を届け、感動を生む』という理念を掲げて農作物を育てています。我が子のように大切に育て、家族や従業員が食べたいと思える安心・安全で美味しい野菜、それが「うちのご野菜」です。生産者である自分達が食べたいと思えるからこそ、消費者の方にも自信を持って提供できると考えておられます。ひのでファームの「うちのご野菜」には、シールをつけて近隣の直売所で販売されているので、是非探してみてください!



DATE

【組織名】

ひのでファーム

【所在地】

蒲生郡日野町十禅師180

【TEL】

090-9041-0632

【HP】

<https://www.hinodefarm.jp/>

きたなかふぁーむ（野洲市市三宅）

しがの農×福通信
第9号掲載
(2021年3月)



●(株)きたなかふぁーむってどんなところ？

(株)きたなかふぁーむ(代表取締役社長 北中良幸さん)は、野洲市市三宅でキュウリ、コマツナ、お米を栽培、経営されておられ、なかでも、キュウリの作付面積、出荷量は全国でもトップクラスになります。

この全国トップクラスを誇るキュウリの栽培については、地域の主婦の方々、高齢者、障害者、外国人研修生などに担われています。このように多様な方々と働くことを大切にされている北中さんですが、その理由は、「農業をより良くするために課題を見つけ解決していく」という会社の経営理念に基づくものとなっています。そこで、今回は、多様な方々と協力して農業を経営されている北中さんの考え方や想いを紹介します。

●全国トップクラスのキュウリハウスを見学させていただきました！

農福通信の取材当日、ハウスの中で手際よくキュウリの収穫作業をされていたのは、地域の福祉作業所の方でした。また、複数の福祉作業所から曜日や時間帯等を替えて来られているそうです。

平日は主婦の方、土・日曜日には地域の高齢者の方などが、自分で勤務する日時を決めて、収穫作業に携わっておられるそうです。また、ハウスの中では、「形がきれいで大きいものが取れた!」や「量がたくさんとれてうれしい!」などの様々な感想が飛び出していました。

多様な方々が集い、働く(株)きたなかふぁーむでは、共に働く仲間から自分にはない視点や感覚を「新たな気づき」として学び、働きやすい作業等への工夫に活かされています。

その一つとして、誰もが手軽にキュウリが収穫できるように作られた「キュウリ収穫用プレート」を紹介し



● 気づきのカタチが、 キュウリ収穫用のプレート

(株)きたなかふぁーむで働く皆さんが、形の揃ったキュウリを手際よく収穫されている秘密は、首から下げているプレートにありました(下写真)。

作業をされている皆さんは、このプレートの長さや幅を目安として、キュウリを採っていたのです。次々と収穫作業をされるベテランの方でも、時折、このプレートを当てて収穫サイズを確認されている姿をみると、収穫時期の見極めの難しさや、「気づき」から生まれたプレートの頼もしさを感じました。



「農業の課題を解決し、より良い農業を作っていく、そのためには農福も必要であると考えます。労働力として考えるのではなく、いろいろな方の力を借りて、教えてもらい、気づかせてもらい会社を運営・経営していくということです。」こう話された北中さんは、これから先も農業をより良くしていくためには、いろいろな方の力を借りていかなければならないと感じておられます。

「キュウリを作る中でいろいろ学んで、様々な人の思いが詰まったキュウリを皆さんにお届けしたい。とっても美味しいですよ!と、最後には満面の笑みで力強く伝えてくれました。



● (株)きたなかふぁーむのキュウリが 美味しい秘密 ～北中さんからのメッセージ～

「農福連携って、最初はボランティアに近いものだと思っていました。」そう話された北中さん。しかし、実際に取り組んでみると、その考え方には大きな変化が生まれました。「彼らは単純な労働力ではありませんでした。私たちに多くのことを教えてくれるし、気づきを与えてくれる。人は、学んだことも時間が経つと忘れてしまいますが、彼らが居てくれると、新たな気づきを社員みんなが貰えるんです。このことはとても重要で、学び、気づきを得られることが出来る環境は、会社にとってプラスになります。」と北中さんは話されています。(右上段につづきます)

DATE

【組織名】

株式会社きたなかふぁーむ

【所在地】

野洲市市三宅1994

【TEL・FAX】

077-587-1717

【HP】

<https://kitanakafarm.co.jp/company/>

NPO法人 縁活 おもや(栗東市霊仙寺)

しがの農×福通信
第7号掲載
(2020年10月)



●「おもや」ってどんなところ？

NPO法人縁活「おもや」(代表 杉田健一さん)は、栗東市霊仙寺を中心に活動している福祉事業所(就労継続支援B型)です。「おもや」では、事業所でのお米や野菜、果物の栽培、事業所以外での農作業(施設外就労)、さらに飲食部門の「オモヤ☆キッチン」の運営にいたるまで、「農・食」をメインに幅広く活動しています。地域で活躍している「おもや」ですが、2011年の立ち上げ当初の利用者はたった1名でした。それが、約10年経った今、「おもや」は26名の利用者と13名のスタッフ(パートを含む)が集い、働く場所になりました。そこで、今回はコロナ禍での取組と「おもや」誕生秘話を御紹介します。

●コロナ禍で生まれ変わるNew「オモヤ★キッチン」!

オーガニック食材がウリの「オモヤ★キッチン」。これまでも様々なメディアで取り上げられましたが、コロナ禍で休業を余儀なくされました。しかし、お店が休業していても、事業所での毎日の農作業は変わりません。ある時、近所の農家さんの中には、作業に没頭して昼食をとらない方も居るという話を思い出し、「しっかりと自分たちのご飯を食べよう」と新たなスローガンを杉田さんは掲げたのです。日々の農作業の中での「まかない飯」、「農家さんも食べやすいお昼ご飯」を新たにテーマに加えた「オモヤ★キッチン」に生まれ変わり、令和2年10月1日から営業が再開されました。自分達が普段食べているご飯を地域の皆さんにも食べてもらいたい、街の人が集う地域のコミュニティの場にしていきたいと考えています。

店舗での営業はもちろん、「おもや」自慢の自然栽培食材を使ったお弁当のテイクアウトもやっています。

●「おもや」誕生秘話と成長ものがたり

元々は福祉施設の事務員をしていた代表の杉田さん。色々な福祉現場を経験して、2009年に杉田さんの地元である栗東市でグループホーム「すうほ」を設立します。グループホームの運営にまい進していた頃、『お父さんから引き継いだ農地を使って、グループホームの人たちと農作業や地域で活動出来たら楽しいんじゃないか?』と思い、事業所「おもや」を新しく立ち上げました。

しかし、新規で立ち上げた事業所は中々利用してもらえません。そんな中、唯一の利用者は、他の事業所では就労のための作業の継続が困難な方でした。その方は、度々スタッフとの間でトラブルになりながらも「おもや」へ通い続けていましたが、ある時突然、「家に引きこもりたい」と言い通所をやめてしまいました。杉田さんはその方に「また来たらおいでや」と声をかけ、見守ることにしました。それから数年経った2018年、その方の保護者から「どうしても『おもや』に行きたい、あの時は楽しかった!と言っているんです。」と連絡があり、「おもや」に帰ってきたのです。この方にとっては、「おもや」は真に「母屋」(自分の居られる場所)であったのでしょう。その方は「おもや」の一員として今でも元気に活動されています。



「おもや」を立ち上げてから3年ほどで利用者は8名まで増えました。「また来たい」と思えるような雰囲気、利用者の気持ちを尊重し見守るスタイルを続け、設立から9年経った2020年には26名もの仲間ができました。

市内各地等に飛び地状態で農地を預かっている「おもや」では、その地域ごとにその場所の農家や住民の方との関係を築いていきました。ある時は、体を悪くして農地の管理が出来ない高齢者に代わって農地を管理したり、「あなたなら畑を任せたいんやけど…」とお願いをされたり、少しずつ、着実に地域で頼られる存在になっています。預かっている農地は、どこでどんなものを育てているのか、いつでも誰でも一目で分かるように、事業所で掲示されています。



●「地域のお手伝い」から始まる農福連携
～「おもや」の生みの親
杉田 健一さんの想い～

「農を一つ的手段として事業所の利用者の皆さんの“自己実現”を目指しています。結果的に農業をやっていますが、僕は、たまたまその入り口が福祉だっただけです。」この想いは農福連携を行っていく上で忘れることの無いように、スタッフにもその都度共有しているという杉田さん。これから農福連携に取り組もうとしている方々には、「今まで本当に農福連携やっていませんでしたか?」と聞きたいそうです。「地域の農家の『てつだい』とかやったりしてなかったですか?それが農福連携なんです。皆さん、どこかしらで困っている人の手助けをしったりしているはず。地域に困っている人はいませんか?とコミュニティに入っていくのが第一歩やと思います。」と伝えてくれています。



2020/10/0



2020/03/31



DATE

【組織名】

NPO法人 縁活 おもや

【所在地】

栗東市霊仙寺1丁目3-24

【TEL】

077-598-5368

【HP】

<https://enkatsu.or.jp/>

【オモヤキッチンTEL】

077-596-3713

「遊べる・学べる淡海子ども食堂」にぜひ、 ご参加ください!

しがの農×福通信
第7号掲載
(2020年10月)



写真提供:社会福祉法人 滋賀県社会福祉協議会

●「遊べる・学べる淡海子ども食堂」の取組について

「遊べる・学べる淡海子ども食堂」は、主に地域のボランティアやNPO、企業など有志の方々により運営され、ご飯を通じて地域ぐるみで子どもを見守り育てていく垣根のない居場所です。

食堂をきっかけに様々な世代がつながり、困っている人を放っておかない、あたたかいまなざしがあふれる地域づくりを進めています。

令和2年11月末現在、県内には136か所の子ども食堂が開設されていますが、子どもたちが歩いていける範囲である小学校区に一つ以上子どもの居場所が広がるよう300か所を目指しています。

●農業者の皆様の子ども食堂へのご参加をお待ちしています!

子どもたちにとって、農業を体験することや地元で採れる季節の食材を使った料理をつくり味わうことは、滋賀ならではの農産物や食文化の魅力を知る良い機会です。また、次世代を担う子どもたちとその家族にアプローチすることで、農業に関心を持つ者や将来の消費者を増やすことも期待できます。

農業者の皆様、地域の子ども食堂の運営にご参加・ご支援いただけることを心待ちにしております。

DATE

【組織名】

滋賀県健康医療福祉部
子ども・青少年局 子ども未来戦略室
(県庁新館2階)

【TEL】

077-528-3550

【E-mail】

em0003@pref.shiga.lg.jp

「農作業をリハビリテーションに生かす」

しがの農×福通信
第8号掲載
(2020年12月)



● 医療・介護×農作業!?

「リハビリテーション」と聞くと、病気やケガで体が不自由になった方が、訓練室の中で体を動かしたり、歩くような様子を想像されるのではないのでしょうか。

実は、1900年初頭に精神科病院で精神的効能を得る目的で、農作業がリハビリテーション(作業療法)として実施されました。

近年、医療や介護分野で「農作業」が身体面、精神面、他者との交流、役割の獲得など社会参加といった様々な側面に複合的に働きかけ、生活の質を向上させる効果があるといわれており、リハビリテーションの手段として注目されています。

滋賀県では、多くの医療・介護施設で農作業をリハビリテーションとして活用できるよう、医療・介護施設向けに取組事例をまとめてリーフレットにしたものを県ホームページに掲載しますので、参考にしてください。

リハビリとしての効果(一例)

作物を管理する。

(体の機能): バランス・腕を上げる・歩行の改善・モノをもつての移動能力等

(認知機能): 集中力・判断力・注意力・記憶力の改善、季節感を感じる等

(その他): 意欲の回復・体力の改善・先への希望・生きがいづくり

【問】この作業、どうですか

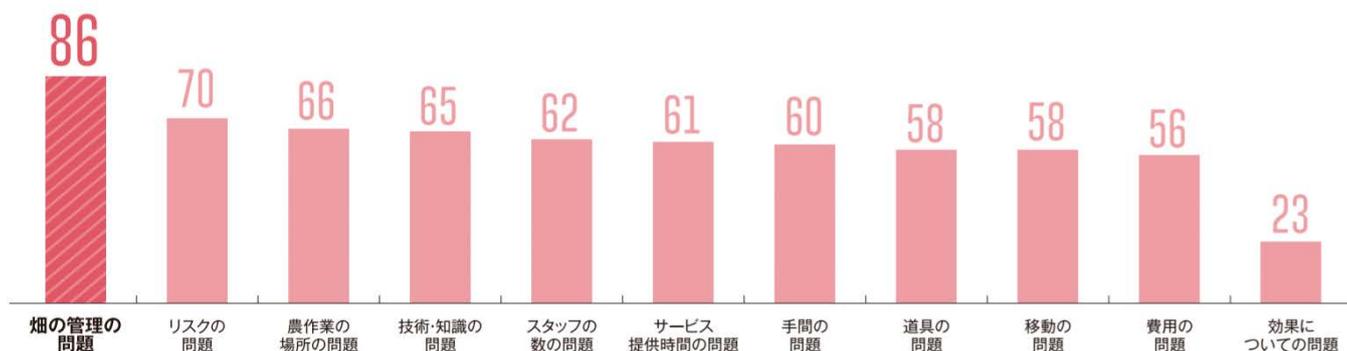
「そらおもしろいわ。」
「これ、収穫した後に誰が買ってくれるんやろ?いくらで売れるのかな?とか想像してたら、わくわくするわ。」



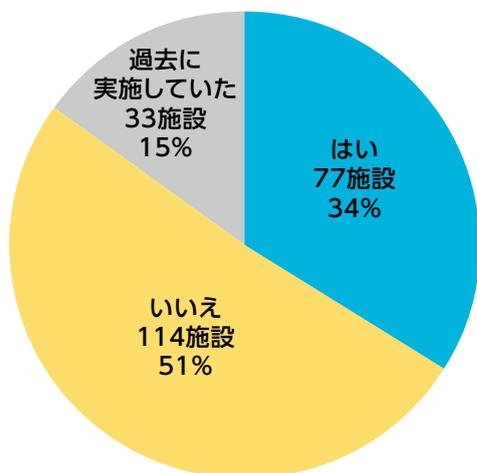
● 課題も多い医療・介護現場での農作業

医療・介護現場で導入するためには畑の管理や農作業の場所、技術・知識不足など様々な課題があり、その解決法も考えながら活用を進めています。ぜひ、ご協力ください。

農作業を実施する際の課題は? (複数回答)



農作業の活用状況



【お問合せ】

滋賀県健康医療福祉部
健康寿命推進課 健康しが企画室
(県庁新館3階)

【TEL】

077-528-3657

【E-mail】

eg00@pref.shiga.lg.jp

葉菜屋（東近江市池田町）

しがの農×福通信
第9号掲載
(2021年3月)



● 社会福祉法人八身福社会水耕ファーム「葉菜屋(はなや)」ってどんなところ？

社会福祉法人八身福社会水耕ファーム「葉菜屋」は、東近江市池田町で2,000㎡もあるガラス温室で水耕栽培に取り組まれている就労継続支援B型の事業所です。2013年に企業から温室を借用したことをきっかけに、利用者の方が作業に取り組みやすい環境にするため、別の温室を借り、一から水耕栽培装置を設置して事業を始められました。リーフレタスや小松菜、水菜といった葉物野菜やハーブを栽培し、直売所やスーパー等で販売されています。えぐみがないことなどの品質が評価され、ホテルのレストランへも提供されています。

現在では、県の「障害福祉サービス事業所の農業技術向上支援事業」により、農業技術アドバイザーの派遣も活用しながら、4名の職員で15名の利用者の方をサポートして一緒に取り組んでおられます。

● 葉菜屋が選ばれる理由とは？

ふと、ハウスの中を見渡した時に目に入るのは、どこまでも続く生き生きと育った葉物野菜。

そして、それぞれの役割を持って作業をされている利用者の方の姿です。「この利用者の中には、音や刺激が気になって集中できない方や、狭い施設の中で一緒に作業をするのが苦手な方、またずっと家で引きこもっていた方がいるんです。」と話す施設長の小島さん。「でも、そういった方もこれだけ広い施設ですから、週に1日でも外に出てきて作業ができるようになった方もいます。」



●水耕栽培、少量多品目のねらい

葉菜屋では、天候に左右されず、年中作業ができることから施設内で行う水耕栽培を選ばれています。また、葉物野菜やハーブ等10種類以上の作物を栽培されています。農業技術アドバイザー(元県の普及指導員)である児島さんは「水耕栽培で少量多品目栽培は、なかなか手間のかかる作業です。農家だとここまで多くの品目や品種を扱いませんね。」と話されます。なぜ、これほどにもたくさんの品種を扱っているのでしょうか。

そのねらいの1つとして、利用者の方に合わせた支援ができることにあるといいます。作業の様子を見学させていただくと、細かな播種作業に集中して取り組むことが得意な方や、ハーブ類の播種から袋詰め、出荷作業まで1人で任されている方がおられます。多種多様な作物を扱うことにより作業内容が増え、利用者の方への支援の幅が広がるということです。岡本農場長はおっしゃいます。「室内での内職作業だと、この部品が何に使われているのか、わからず作業をすることになりがちです。でも、ここでは作物が育つ姿を見ることが、少しずつ1人で完結できる作業を増やしていくことによって、自分自身で育てたという達成感やその野菜が売れる喜び、そしてやりがいに繋がると考えています。」

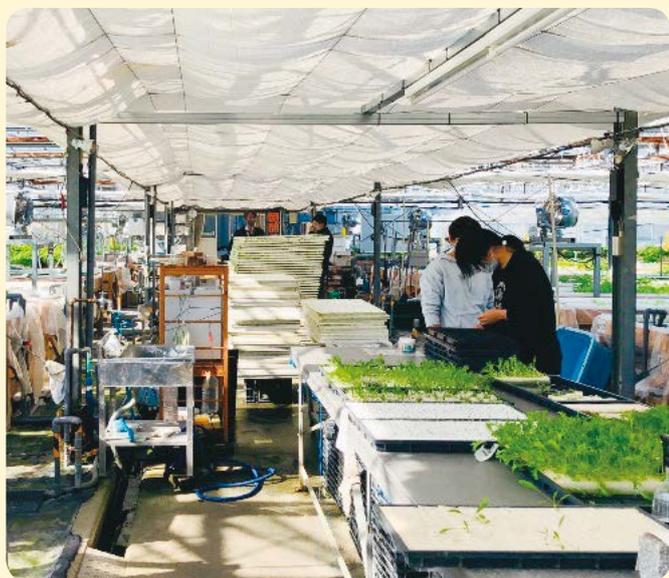


●障害福祉サービス事業所で農業に取り組む理由

農業は生き物相手であり毎日同じ作業があるとは限りません。作業内容が変わるたびに利用者の方への説明や指導などの関わり方も変えていく大変さがあるといいます。多様な背景を持つ方を受け入れる中では安定して通所することが難しい方もおられ、作業が追いつかないことや、新型コロナウイルス感染症の影響による販売縮小や価格の下落による売上額の減少等、経営的な難しさもあるのが実状です。

「工賃を向上させることだけを考えると、職員が作業をする方が早くて綺麗にできるでしょうが、そうではなくて、利用者の方と一緒にやって、作業の定着を図ることが重要なんです。」とサービス管理責任者の加藤さんはおっしゃいます。

農業は作業のバリエーションが多いため、作業の定着までに時間がかかるという側面もありますが、その分時間をかけて支援する中で、「こんな作業もできたのか!」「こんな強みがあったのか!」という新しい発見や作業への適性が見られる面白さもあり、それが農業を選ぶ理由の1つでもあるとのこと。



●「葉菜屋」さんの今後の農福連携への思い

葉菜屋の職員の皆さんはおっしゃいます。「県内で農福連携を知っている人はまだまだ少ないと感じています。農福連携に取り組まれている事業所や農家、地域のJAや飲食店の方ともっと交流できる機会があれば、「農福連携」を一緒になってできると思います。そんな中で、「葉菜屋」で作られた野菜ということで買ってくれる人が1人でも増えて、利用者さんの工賃につながる。そんなふうになればいいなと思っています。」

今回の取材を通じて、葉菜屋のスタッフのみなさんが利用者の方にとって何が一番良い環境なのか、どの作業が向いているのかを一人一人に寄り添って考え、支援に取り組まれていることが、しっかりと伝わってきました!



DATE

【組織名】

社会福祉法人八身福社会水耕ファーム
葉菜屋

【所在地】

東近江市池田町642番地

【TEL・FAX】

0748-56-1381

【HP】

<http://hashin.jp/>

(社会福祉法人八身福社会)

農福連携の推進に向けた 県事業について(令和3年度)

● 農業者と福祉事業所の農作業受委託のマッチングについて(担当:農政課)

農業分野での障害者雇用や農作業受委託等による障害者の雇用・就労の場の拡大や農福連携を契機とした農業経営の発展を支援するために「農福連携コーディネーター」を配置して、農業者と福祉事業所等のマッチングや連絡調整等を行っています。ご関心のある方は以下の問合せ先まで御相談ください。

【問合せ先】

- ・県担当課:農政課 企画・財産係 TEL 077-528-3812 FAX 077-528-4880
- ・運営事務局:NPO法人滋賀県社会就労事業支援センター
滋賀県草津市大路2丁目11-15 TEL:077-566-8266 FAX:077-566-8277

● 農福連携トライアル事業について(担当:農政課)

地域の農業者と福祉事業者等が協働し「新たな農福連携」を実施する場合(定額助成:5万円以内)、障害者等を雇用等している農業者や福祉事業所等が新しい品目への着手や既存栽培品目の生産拡大を行い「発展した農福連携」を実施する場合(定率1/2助成:25万円以内)において、その必要な経費の一部について予算の範囲内において事業費を助成します。事業応募期間等の詳細は、県のHPをご覧ください。

滋賀県 農福連携

検索

● 農業に取り組む福祉事業所等への技術的な支援について(担当:障害福祉課)

農業に取り組む福祉事業所等に対して、元県普及指導員や元JA職員、6次産業化プランナーを経験された「農業技術アドバイザー」を派遣し、農業技術に関する専門的な助言や指導を行っております。ご関心のある方は以下の問合せ先まで御相談ください。

【問合せ先】

- ・県担当課:障害福祉課 社会活動係 TEL 077-528-3542 FAX 077-528-4853
- ・運営事務局:NPO法人滋賀県社会就労事業支援センター
滋賀県草津市大路2丁目11-15 TEL:077-566-8266 FAX:077-566-8277

● 農業で地域の子どもを応援しようプロジェクトについて(担当:子ども・青少年局)

滋賀ならではの農業体験や地場産農産物の伝統料理を子ども関係団体等に提供等される農業関係団体等に対して必要となる事業費を助成しています(上限7万5千円)。ご関心のある農業関係団体等の方は以下の問合せ先まで御相談ください。

【問合せ先】

- 子ども・青少年局 子ども未来戦略室 総務・青少年係 TEL 077-528-3550 FAX 077-528-4854

「しがの農×福ネットワーク」 参加団体・個人を募集しています!

●「しがの農×福ネットワーク」とは?

「農福連携」に関心のある個人、グループ、民間団体、企業、大学、行政機関などが、それぞれが持つ農福連携に関する情報の発信や啓発、意見交換、参加者どうしの農福連携の取組の支援などを行うことにより、滋賀の農福連携を推進するネットワークです。

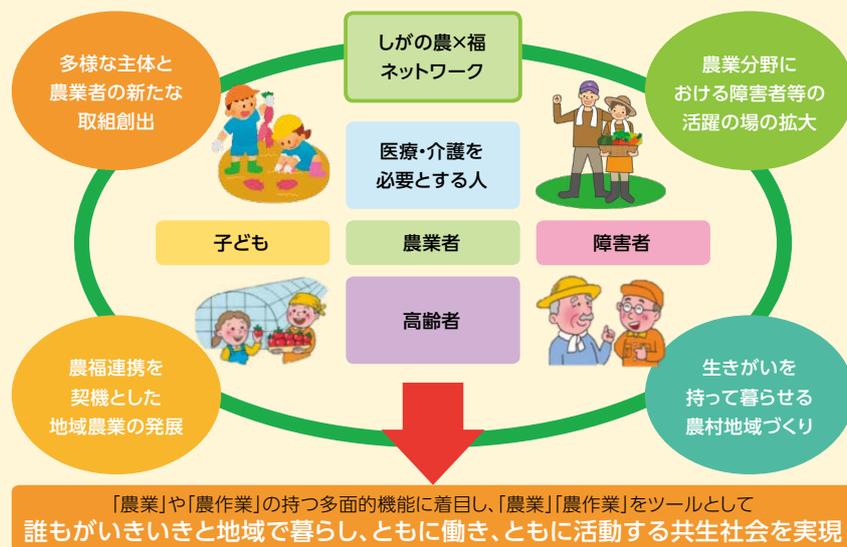
●「しがの農×福ネットワーク」が目指すもの

県では、農業・農村に活気があり、障害のある人もない人もともに働きながら、いきいきと地域で暮らし、活動できる共生社会を目指しています。

「しがの農×福ネットワーク」では、農業や農作業の持つ多面的機能(*)に着目し、障害者や医療現場、高齢者、子どもなど様々な分野で取組が行われている皆さんに参画いただき、農業と福祉の連携により、双方の分野の課題を解決し、「農業」「農作業」をツールとした共生社会を実現していきます。

*農業や農作業の持つ多面的機能

農業や農作業には、農産物の生産活動以外に、癒しや安らぎをもたらす機能、身体能力を高める機能、地域の結びつきを強める機能などがあるとされています。



●主な活動内容

- ・農福連携の取組事例の紹介や情報交換を行う交流会や研修会の開催
- ・会員の農福連携の取組内容の情報発信
- ・会員間の農福連携に関する取組の支援等

「しがの農×福」ネットワーク参加申込書

「しがの農×福ネットワーク」では、こんなみなさまを募集しています!

- ◆ 障害者の受入や雇用に関心をお持ちの農業者の方
 - ◆ 農業を事業に取り入れたい福祉関係者の方
 - ◆ 農福連携に関する連携先をお探しの企業・団体の方
 - ◆ 農業を通じた地域活性化の取組に興味をお持ちの方
 - ◆ 農福連携に取り組みたいが、何をしたらよいかとお悩みの方
- 参加いただける方は、このページをコピーしていただくか、県HPの様式をダウンロードしていただき、必要事項を御記入の上、FAXまたはE-mailにて下記の申込先まで御送付ください。

【お問合せ・申込先】滋賀県農政水産部農政課 企画・財産係

FAX: 077-528-4880 E-mail: ga00@pref.shiga.lg.jp

1 基本情報(※この欄の内容は「公表」します。)

団体名 個人名	※参加者、参加団体等の名称をご記入ください。(例:「株式会社〇〇」など)
事業・取組内容の概要	※主な事業・取組の内容について、100～300文字程度でご紹介ください。取組内容がわかる印刷物等がありましたら、1部提出願います。(農福連携に関わる内容以外のことでも結構です。)
所在地	※公表可能な範囲でお書きください。(公表に支障がある場合、「市町村名のみ」等でも結構です。)
ホームページURL(任意)	※ホームページやSNS等がある場合はご記入ください。

2 御担当者様の連絡先

住所 (書類等の郵送先)	※1の「所在地」と同じ場合は、空欄で結構です。
担当者所属・氏名	
電話番号	
FAX番号	
メールアドレス	

【参加に関する留意事項】

- ・参加に伴う義務はありません。
- ・現在、農福連携に関連する活動を行っていない団体の参加も歓迎いたします。
- ・みなさまからいただいた情報をもとに、参加者間のマッチング等を進めます。
- ・ご記入いただいたメールアドレスに情報提供を行うほか、調査等のご協力をお願いすることがあります。
- ・御提出いただいた情報は、当ネットワークの活動に関する事項以外には使用しません。
- ・上記参加様式と併せて、事例紹介等を行う「農福連携カルテ」の様式を県HPに掲載していますので、こちらも併せてご覧ください。



農福連携事例集

発行 令和3年(2021年)3月

滋賀県農政水産部農政課

〒520-8577 滋賀県大津市京町四丁目1-1

TEL:077-528-3812

FAX:077-528-4880

E-mail:ga00@pref.shiga.lg.jp



農福連携の動画公開中!

滋賀県 農福連携

検索